

# 過去性を持つ 和語接頭辞「元」について

—後接名詞にかかるとはいえない場合を中心に

張明

## ◆要旨

「元」は過去性を持つ和語接頭辞として、直後に名詞が後接し、その名詞にかかって修飾するのが一般的である。しかし、後接名詞にかかるとはいえない「元」がコーパスから確認される。本稿は、後接名詞にかかるとはいえない用例を中心に「元」について考察するものである。「元」が後接名詞にかからないケースとして、本稿は、「元」の「副詞的用法」と「所属を含めた名詞句との結合用法」の2つを取り上げ、それぞれの特徴を論じ、なぜ後接名詞にかかるとはいえないのか、後接名詞にかからないのなら、何にかかるとのかについて検討する。更に、「元」には後接名詞にかからない用例が存在するが、字音接頭辞「前」には存在しないという違いについても指摘する。

## ◆キーワード

接頭辞、「元」、「前」、  
タ形、所属

## ◆ABSTRACT

The past indicator native prefix *moto* modifies the noun that follows it. However, a type of *moto* that does not affect the noun that follows it can be confirmed in the corpus. This paper is a study on *moto* centered around examples where it does not affect the noun that follows it. This paper takes up the adverbial usage and combinations of *moto* with noun phrases including belonging as cases where *moto* does not affect the noun that follows it, and discusses each of their distinctive features and examines why they do not affect the noun that follows it, and what they do affect if not the noun that follows it. Also, that is the difference between *moto* and *zen*, *Zen* is the Sino-Japanese prefix and expresses the similar meaning to *moto* but does not have examples where it does not affect the noun that follows it.

## ◆KEY WORDS

prefix, *moto*, *zen*,  
*ta*-form, belonging

On the Past Indicator  
Native Prefix *Moto*  
The Type of *Moto* that does not Affect  
the Noun that Follows it  
ZHANG MING

## 1 はじめに

過去性を持つ接頭辞「元」は、次のような用例がコーパス<sup>[註1]</sup>から観察される。

- (1) その故に、かつて田中元首相は竹下政権づくりを遅らせることに腐心したものだ。 (BCCWJ『永田町の暗闇』1990)<sup>[註2]</sup>
- (2) 元ヤマメ料理店を利用した……。 (BCCWJ『Angling』2001年12月号)
- (3) 上梅さんは元刑事ですし、……。 (BCCWJ『非情連鎖』2004)
- (4) 元タレントの高見知佳さん……。 (BCCWJ『市民のひろば』2008年07号)
- (5) 野末陳平さん (元参院議員) (BCCWJ『北海道新聞』夕刊、2001年6月15日)

上記の例文からわかるように、「元」は「首相」「ヤマメ料理店」「刑事」などの名詞が後接し、発話時現在は「元首相」「元刑事」という状態で、現在は「首相」「刑事」ではないという意味を表す。すなわち、「元」は直後に位置する「首相」「刑事」にかかり、その後接名詞に意味を添加し、後接名詞を修飾する。このように、「元」の直後に位置する名詞と「元」の意味を添加し、「元」が意味的にかかる名詞が一致する場合は、本稿では「元」の「基本的な用法」と呼ぶ。また、後接名詞は職業名だけでなく、「ヤマメ料理店」のような職業名以外と結合する用例も存在する。そして「元+後接名詞」は主語、補語、述語、ノ格規定語などの文の成分として用いられる。

しかし、「元」の直後に名詞が後接してはいるものの、「元」がその後接名詞にかかるとはいえない用例がBCCWJから観察される。そのような「元」の用例について論じるものは管見の限り見当たらない。よって、本稿は、後接名詞にかかるとはいえない「元」に焦点を当て、その2つのケースとして、「元」の「副詞的用法」と「所属を含めた名詞句との結合法」を取り上げ、それぞれの特徴を明らかにすることを目的とする。

## 2 「元」の「副詞的用法」

本節では、後接名詞にかかるとはいえない「元」の第一のケースとして、「元」の「副詞的用法」を取り上げて考察する。

### 2.1 副詞的用法とは

国語辞典における「元」の意味記述に、「副詞的」という表現が見られる。

- (6) 「彼はもと教員だった」<sup>[註3]</sup>のように副詞的に使われる。  
(『新選国語辞典』(第九版.小学館.2011))
- (7) 副詞的にも使う。「彼は一軍人だった」  
(『岩波国語辞典』(第7版.岩波書店.2009))

(6) (7) を見ると、副詞的に使われる「元」は、「だった」という過去形(以下、タ形)と関係があるようである。実例を挙げながら、副詞的に使われる「元」は述語のタ形とどのような関係があるのか、基本的な用法の「元」とどのような違いが見られるのかについて確認する。

- (8) 速水は、日商(日商岩井の前身)創立者の一人で、元社長である永井幸太郎の三女の娘婿である。  
(BCCWJ『現代』2004年11月号)
- (9) 一人娘が嫁ぎ、奥さんと二人暮らしの元小学校教師である。  
(BCCWJ『私の海彦山彦』1989)
- (10) 病棟に元校長先生だった男性患者がいますが、……。  
(BCCWJ『安楽病棟』1999)
- (11) アップルの創始者で現CEOのスティーブ・ジョブズは元ヒッピーだった。  
(BCCWJ『すでに始まっている未来』2003)

(6) (7) と同様に、(8) ~ (11) の「元+後接名詞」は名詞述語文の述語名詞として使われている。(8) (9) は非過去形(以下、ル形)の「である」、(10)

(11) はタ形の「だった」が使われている。

(8) (9) は「である」を用い、発話時現在の状態を述べる。発話時現在は「元社長」「元小学校教師」という状態で、現在は「社長」「小学校教師」ではないという意味を表す。(8) (9) の「元」は「社長」「小学校教師」にかかって、後接名詞に意味を添加し、名詞を修飾する。つまり、基本的な用法である。

一方、(10) (11) は「だった」を用い、発話時より前の状態を述べる。もし(8) (9) と同様に基本的な用法だと考えるならば、過去のある時点において「元校長先生」「元ヒッピー」という状態であったことを表すので、その過去のある時点においては「校長先生」「ヒッピー」ではなかったという意味を表すことになってしまう。しかし、(10) (11) はその意味ではなく、過去のある時点においては「校長先生」「ヒッピー」であったという意味である。(10) (11) の「だった」を「である」に置き換えても文意は変わらないからである。だとすると、(10) (11) は基本的な用法として解釈するのに無理がある。「元」の直後に名詞の「校長先生」「ヒッピー」が位置し、形式的には後接名詞にかかるが、意味的には「元」は「だった」というタ形と共起し、「だった」にかかると考えられる。このように、(10) (11) のような「元」を「副詞的用法」と呼ぶこととする。

以上をまとめると、「元」の副詞的用法とは(12) のようになる。

(12) 「元」の副詞的用法とは、形式的に「元」の直後に名詞が位置するが、その後接名詞にかかるのではなく、過去を表すタ形と共起し、述語のタ形にかかる用法である<sup>[註4]</sup>。

それでは、なぜ「元校長先生だった男性患者」のように過去のタ形が用いられるのか。

大島(2003:107)では、「「～の」による連体修飾はいわば節による連体修飾の縮約版であり、節の形式にパラフレーズできる」と述べられている。「元校長先生の男性患者」における「の」がパラフレーズして「元校長先生である男性患者」となる。更に「元」が「むかし」「以前」といった〈過去〉の意味を持ち、その〈過去〉の意味による影響で述語がタ形になることが想定されやすい。そのため、「元」が持つ〈過去〉の意味の影響で、連体修飾節がタ形をとるとい

うことになる。それが「元」がタ形にかかる理由だと考えられる<sup>[註5]</sup>。

## 2.2 出現する構文的条件

前項では、副詞的用法と解釈される際に、タ形と必ず共起することを述べた。本項では、出現する構文的条件について考察する。

### 2.2.1 「元+後接名詞」が名詞述語文の述語名詞である場合

国語辞典の用例(6) (7) も、BCCWJの実例(10) (11) も、「元+後接名詞」が名詞述語文の述語名詞として用いられている。次の(13) (14) も同様である。

(13) 元労務担当役員であった副社長の堂本信介は、現在、運航、営業、人事を統括する立場で、団交の席には出席しない。(BCCWJ『沈まぬ太陽』1999)

(14) みちのく北方漁船博物館展示機は、元日本エアコミューターの機体だったが、……(BCCWJ「Yahoo!ブログ」2008)

(10) (13) のように、「元+後接名詞」を用いた名詞述語文が連体修飾節になっている場合を、便宜上「連体用法」と呼ぶ。一方、(11) (14) のように文末や連用節に使われる場合を、便宜上「終止用法」と呼ぶ。連体用法か終止用法かという点で異なるが、「元+後接名詞」が名詞述語文の述語名詞として用いられ、「元」の直後に位置する名詞にかかるのではなく、「元」がコピュラのタ形と共起し、タ形にかかる副詞的用法である点で共通する。

### 2.2.2 「元+後接名詞」が動詞述語文の補語である場合

2.2.1 で見てきた名詞述語文の述語名詞だけでなく、「元+後接名詞」が動詞述語文の補語として用いられる場合の「元」にも副詞的用法の用例が観察される。次の(15)～(18)を取り上げる。

(15) Hさんは元新聞記者をした方で今は“歩こう会”の会長です。

(BCCWJ「Yahoo!ブログ」2008)

(16) 元運輸大臣をなされた細田委員ですね、こういうふうにおっしゃって

いますね。 (BCCWJ『国会会議録第104回国会』1986)

(17) 元山形県庁拓務課に勤務していた大江善松氏がつぎのように証言している。 (BCCWJ『日本列島に往く』2001)

(18) 長沼氏は東京都職員で元萩山実務学校に勤務された人。 (BCCWJ『感化院の記憶』2001)

(15) (16) は「人や組織が、(職業や社会的な立場などに関する)ある職務や任務を行う」<sup>[注6]</sup> という意味を表す「する」「なさる」が使われている。(17) (18) は「所属先+動詞」という所属先を表す文である。いずれも動詞述語文である。このような職歴を表す動詞述語文の場合も、「元」は後接名詞の「新聞記者」「山形県庁拓務課」にかかるのではなく、「した」「勤務していた」などの述語のタ形にかかり、副詞的用法として解釈される。

(15) ~ (18) は「連体用法」の場合であるが、当然ながら (19) (20) のような「終止用法」の用例もある。

(19) 元車関係の仕事してました。 (BCCWJ「Yahoo!知恵袋」2005)

(20) 【参考人(川原正人君)】私が承知している範囲では、ある日本の大新聞の元モスクワの特派員をしておられたというふうに聞いております。 (BCCWJ『第80回国国会議録』1977)

しかし、動詞述語文の用例の中に、職歴を表す動詞述語文の補語でない用例もBCCWJから観察された。

(21) 木造法道仙人立像(国重文)は元開山堂にあったもので、老人の風貌で鎌倉時代の写実的な作風を示す。 (BCCWJ『兵庫県の歴史散歩』1990)

(22) 元少女漫画で育った世代としては、今の少女漫画は少女漫画のカテゴリに入れたくないです。 (BCCWJ「Yahoo!知恵袋」2005)

(23) ……十五万円で買った元元田谷区役所で使っていたという中古のステーションワゴンを、……。 (BCCWJ『スーパー書齋の遊戯術』1997)

「元」はそれぞれ「あった」「育った」「使っていた」などの述語のタ形にかかる副詞的用法である。広く捉えれば、(21) ~ (23) は経歴を表す文だと考えられる。例えば、(21) は、木造法道仙人立像は昔開山堂に安置された時期があったというように、一種の経歴として理解できる。職歴は経歴の下位概念とも考えられ、当然ながら経歴を表している。副詞的用法の「元」がどのような動詞述語文に用いられるのか、より多くの用例を考察する必要があるが、本稿では、経歴を表す動詞述語文に用いられると規定する。

以上のように、副詞的用法の出現する構文的条件は2つあると述べた。1つは、「元+後接名詞」が名詞述語文の述語名詞として用いられる場合、もう1つは、経歴を表す動詞述語文の補語として用いられる場合である。次の2.2.3では、この2つの構文的条件の関係について検討する。

### 2.2.3 2つの構文的条件の関係

まず、共通点について確認する。共通点は2つあり、1つは「元+後接名詞」を用いた名詞述語文や動詞述語文がどちらも経歴を表すことである。動詞述語文の場合についてはすでに2.2.2で述べたが、名詞述語文の場合も経歴を表すと考えられる。(11)の「ジョブズは元ヒッピーだった」、(13)の「元労務担当役員であった副社長」といった表現は、職歴・経歴を表している。

もう1つの共通点は、「元」を用例から取り除いても述べられた事実が大きく変わることはないということである。副詞的用法の「元」は〈過去〉の意味を持つため、過去を表すタ形と意味が重なり、タ形が存在することによって、副詞的用法の「元」を用例から取り除いても述べられた事実は変わらない。(13)の「元労務担当役員であった副社長」と「労務担当役員であった副社長」、(15)の「元新聞記者をした方」と「新聞記者をした方」、といった用例では「元」がなくても、述べられた事実は変わらない。「元々労務担当役員だった」「元々新聞記者をした」<sup>[注7]</sup>といった事実を強調したいときに、あるいは強く印象づけるために、意味の重複が多少あるにもかかわらず、副詞的用法の「元」が使用されると考えられる<sup>[注8]</sup>。

次に、相違点について確認する。名詞述語文の場合は、コンピュータのタ形をル形に置き換えても述べられた事実は変わらない。(11)の「ジョブズは元ヒッ



(27) (28) のcとdで示したように、「昔」のような時間関係の副詞の出現位置は比較的自由である。それに対して、「元」はaのように、「通商大臣」「モスクワの特派員」といった名詞の前に位置するのが一般的であり、bのように動詞の前に位置すると、不自然になる。それは、副詞とは異なり、「元」は後接名詞の前に位置し、名詞を修飾する接頭辞であることを物語っている。

### 3 「元」の「所属を含めた名詞句との結合用法」

本節では、後接名詞にかかるとはいえないもう1つのケースとして、「元」の「所属を含めた名詞句との結合用法」を検討する。

#### 3.1 所属を含めた名詞句との結合用法とは

まず、(29) (30) の例を取り上げ、所属を含めた名詞句との結合用法とは何かについて述べる。

(29) 元SMAPの森が初G1 (BCCWJ「Yahoo!ブログ」2008)

(30) 元ロッテの早川健一郎さんと、元日本ハムの田中聡さんである。  
(BCCWJ『背番号三桁』2004)

(29) の「元」の直後に「SMAP」という名詞が後接し、「元」は「SMAP」にかかるように見えるが、「SMAP」というグループそのものの改名や消滅といった経歴の変化を意味するものではない。(29) は「森という人が過去にはSMAPのメンバーだったが、現在はSMAPのメンバーではない」という意味を表し、「森」という人の経歴の変化を述べるものである。つまり、(29) の「元」は厳密に言えば、「SMAP」にかかるのではなく、「SMAP」という所属を含めた「SMAPの森」という名詞句全体にかかる。このように、直後の「SMAP」にかかるのではなく、「SMAP」といった所属を含めた「SMAPの森」という名詞句全体にかかる用法を本稿では「所属を含めた名詞句との結合用法」と呼ぶ。

(30) も同様であり、「ロッテ」「日本ハム」という組織そのものの経歴の変化を意味するものではない。(30) は「早川健一郎」「田中聡」という人の経歴

の変化を表すものである。「元」は「ロッテ」「日本ハム」という所属を含めた「ロッテの早川健一郎」「日本ハムの田中聡」という名詞句全体にかかる。

#### 3.2 基本的な用法との違い

所属を含めた名詞句との結合用法は、基本的な用法とどのように異なるのか、用例を比較しながら確認しておく。

(31) 元フジテレビの近藤サトアナウンサー (三十五才) が結婚報告をした。  
(BCCWJ『女性セブン』2004年2月12日号)

(32) 元国立科学博物館の浅間一男教授 (BCCWJ『アインシュタインTV』1992)

まず、後接名詞の種類が異なる。(31) (32) の「元」は所属を含めた名詞句との結合用法である。(32) を例にすると、「元」の後接名詞は「国立科学博物館」であるが、「国立科学博物館に所属している浅間一男教授という状態」から「国立科学博物館に所属しない浅間一男教授という状態」への変化を含意し、「元」は「国立科学博物館」にかかるのではなく、「国立科学博物館の浅間一男教授」という名詞句全体にかかる。(31) (32) からわかるように、「元」の後接名詞は「フジテレビ」「国立科学博物館」といった所属を表す名詞である。

それに対して、基本的な用法の「元」は(33) (34) のように、後接名詞の直後に「の」がない場合もあれば、(35) (36) のように、「の」がある場合もあるが、後接名詞は職業を表す名詞が多く使用され、所属を表す語ではない。

(33) その故に、かつて田中元首相は竹下政権づくりを遅らせることに腐心したものだ。 (= (1) の再掲)

(34) 上梅さんは元刑事ですし、……。 (= (3) の再掲)

(35) 子どもへの英語教育活動を行っている元NHKアナウンサーの久保純子さんは、……。 (BCCWJ『早期教育と脳』2004)

(36) 元サッカー選手の中田英寿さんが出席、……。 (BCCWJ「Yahoo!ブログ」2008)

また、所属を含めた名詞句との結合用法の (31) (32) も、基本的な用法の (35) (36) も、「元+後接名詞+の+固有名詞」という構造を持っているが、その「の」の意味解釈にも違いがある。(35)「元NHKアナウンサーの久保純子さん」と(36)「元サッカー選手の中田英寿さん」の「の」は、「コレラ患者の大学生」「ピアニストの政治家」の「の」と同様に、西山(2003)の「タイプ[B]:NP<sub>1</sub>であるNP<sub>2</sub>」である。一方、(31)「元フジテレビの近藤サトアナウンサー」と(32)「元国立科学博物館の浅間一男教授」の「の」は、「洋子の首飾り」「北海道の俳優」と同様に、西山(2003)の「タイプ[A]:NP<sub>1</sub>と関係Rを有するNP<sub>2</sub>」である。また、西山(2003)によると、タイプ[A]の「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」において示しているのはあくまでもNP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>は関係Rを有することであり、スロットRの具体的な値はコンテキストの中で語用論的に補充される。しかし、語用論的に自由な読みができるタイプ[A]であっても、「元」の存在によって、「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」全体が職歴・経歴という意味の限定が起きると考えられる。

### 3.3 副詞的用法との関係

2節で見てきた通り、副詞的用法の「元」はタ形にかかる。よって、(37) (38) のように、述語のタ形が用いられていないものは、副詞的用法ではなく、所属を含めた名詞句との結合用法である。

(37) 福祉財団を立ち上げた元ヤマト運輸の小倉昌男氏。  
(BCCWJ『コミュニケーションのノウハウ・ドゥハウ』2005)

(38) 元放送部の吉岡聖恵が、……。 (BCCWJ「Yahoo!ブログ」2008)

しかし、次の(39) (40) で示すように、(37) (38) の所属を表す名詞の直後の「の」を「にいた」「に所属した」に置き換えても、文意はさほど変わらない。

(39) 福祉財団を立ち上げた元ヤマト運輸にいた小倉昌男氏。

(40) 元放送部に所属した吉岡聖恵が、……。

(39) (40) は、「元」は「いた」「所属した」といった動詞のタ形にかかる副

詞的用法である。一方(37) (38) は「いた」「所属した」といった動詞ではなく、「の」が使われている以上、厳密に言えば副詞的用法ではないが、その「の」が「にいた」「に所属した」といった動詞に置き換えられても文意が変わらないという点で、(37) (38) のような所属を含めた名詞句との結合用法は副詞的用法とは無関係ではなく、副詞的用法に近い側面を有するといえる。

## 4 字音接頭辞「前」との比較

字音接頭辞「前」は、次のような用例がBCCWJから観察される。まず、「前」と「元」の類似性を確認しておく。

(41) しかし、橋本政権となれば、竹下前首相の力は急速に弱まるのが予想される。  
(BCCWJ『永田町の暗闇』1990)

(42) 相川は管理部門育ちで、前社長時代には秘書課長を務めていた。  
(BCCWJ『白い眼 リクルート・ファイル』1989)

「前」は「首相」「社長」といった名詞に後接し、発話時現在は「前首相」「前社長」という状態であり、現在は「首相」「社長」ではないという意味を表す。このように、「前」は基本的な用法の「元」と同様に、直後に位置する「首相」「社長」にかかり、その後接名詞に意味を添加し、名詞を修飾する。

「元」と「前」の比較について論じるものには久保(2016)がある。久保(2016)では、「元」と「前」の共起関係と意味について考察を行っている。「元」が「個体の属性」、「前」が「履歴上の値」として解釈されるという差異が、「元」と「前」の共起関係と意味の差異に影響している(同:74)と指摘している。

しかし、久保(2016)の考察では、基本的な用法の用例しか扱われておらず、副詞的用法と所属を含めた名詞句との結合用法に関する指摘はない。

2節で述語のタ形にかかる副詞的用法の「元」を見てきた。しかし、BCCWJで「前」の用例を収集したところ、副詞的用法のように、タ形にかかる用例は見つからなかった。また、(43) のような所属を表す名詞と結合する用例がBCCWJから観察されたが、3節で見てきた所属を含めた名詞句との結合用法

の用例は見つからなかった。

- (43) 阪神の町田（前広島）、広島福井（前巨人）、ロッテの林（元ダイエー、前日本ハム）のうち、今シーズン最も活躍できるのは誰でしょうか。  
（BCCWJ「Yahoo!知恵袋」2005）

よって、先行研究で指摘された「元」と「前」の接頭辞そのものの意味解釈の違いだけでなく、後接名詞にかからない副詞的用法と所属を含めた名詞句との結合用法を有するかどうかにおいても違いが見られた<sup>[注9]</sup>。

## 5 おわりに

本稿は、後接名詞にかかって名詞を修飾する基本的な用法だけでなく、後接名詞にかかるとはいえない副詞的用法と所属を含めた名詞句との結合用法も「元」が有することを述べてきた。その全体像を示すと、次の表1のようなになる。

表1 「元」の全体像

用例（作例）	用法		
元編集長が／を… 元編集長の／である田中 田中は元編集長である。	基本的な用法		「元」が後接名詞にかかって、名詞を修飾する 「前」 ○ <sup>[注10]</sup>
元編集長だった田中 田中は元編集長だった。	副詞的用法	名詞述語文 連体用法 終止用法	「元」が後接名詞にかかるのではなく、述語のタ形にかかる 「前」 ×
元編集長をしていた田中 元S出版社にいた田中 田中は元編集長をしていた。 田中は元S出版社にいた。		経歴を表す動詞述語文 連体用法 終止用法	
元S出版社の田中	所属を含めた名詞句との結合用法		「元」が後接名詞にかかるのではなく、所属を含めた名詞句全体にかかる

副詞的用法を持つ接頭辞は「元」のほか、どのようなものがあるのか。山下（2017）では、程度を強調する意味のある字音形態素の中に、「超」「激」のように、「程度副詞的な用法の見られるものもある」（p.199）と指摘されている。

(44) (45) のような用例が挙げられている。

- (44) トシ君の受け身なところとか、超ぐっと来たよ。 （山下2017:199）  
(45) これ以来色々しましたが、激しくてヤバイです。 （同上）

字音形態素・接辞の副詞的用法については、ほかの事例を集め、更なる検討が必要であり、今後の課題にしたい。 〈早稲田文化館〉

### 注

- [注1] …… 本稿は国立国語研究所で制作された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下BCCWJ）を使用し、用例を収集した。
- [注2] …… 下線は筆者による。例文における漢数字や算用数字はすべて原文のママである。
- [注3] …… 『新選国語辞典』では、「もと」という平仮名表記が用いられているが、本稿は「元」という漢字表記のみ取り上げる。平仮名表記が使われても、接頭辞であることは変わらない。ただし、表記の違いは副詞的用法とどう関係しているのかという問題は更に検討する必要があり、今後の課題にしたい。
- [注4] …… (12) において、副詞的用法の「元」は述語のタ形にかかる述べた。しかし、(10) (11) と同様に「元+後接名詞」が名詞述語文の述語名詞であり、かつタ形が用いられているが、副詞的用法とはいえない用例がある。  
(ア) 元教師だった結城のことを、加護と辻だけはいまだに“結城先生”と呼んでいた。 （BCCWJ『ミニモニ。におまかせっ!』2003）  
(イ) ガイドは元兵士だったから、大胆で慎重だった。 （BCCWJ『戦場特派員』2001）  
(ア) (イ) は一見 (10) (11) と同じように見えるが、副詞的用法とはいえない。なぜなら、(ア) (イ) では、主節述語「呼んでいた」「慎重だった」が表す過去の時点において、すでに「元教師」「元兵士」であるため、波線のタ形は主節の影響（いわば「時制の一致」）でタ形となっているのであって、「元」が持つ〈過去〉の意味によるのではないとも考えられるからである。つまり (ア) (イ) の「元」は基本的な用法と解釈される。本稿ではこのような用例を除き、確実に副詞的用法といえるもののみを扱うことにする。
- [注5] …… ただし、「元校長先生の男性患者」から、「元校長先生である男性患者」を経由せずに、「元校長先生だった男性患者」が直接的に派生する、という可能性も考えられる。

- [注6] …… 国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』(<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp>)の「する」という項目によるものである。
- [注7] …… 副詞的用法の「元」は「元々」「元々は」と類似し、置き換えられる場合が存在する。三者の関係も興味深いことであり、今後の課題にする。
- [注8] …… 副詞的用法の「元」と同様に、「元卒業生」という表現の「元」も余分に使用されている。  
(ウ) 終戦直前、学童疎開と空襲で卒業式を開くことができなかった豊玉第二国民学校(現練馬区立豊玉第二小学校)の卒業式が三十一日、五十五年ぶりに同小で行われ、元卒業生四人に卒業証書が手渡された。  
(『読売新聞』2000年11月1日)  
「卒業生」は一度卒業してしまえば永久にその属性が付与されているため、「元」がつかなくても、述べられた事実は変わらない。なぜ、「元」が余分に使用されるのか。その理由は副詞的用法の「元」と共通する側面を有する。最近卒業したばかりではなく、何十年も前に卒業したという意味を強調するため、「元」が使用されたのではないかと考えられる。「元卒業生」という表現と本稿の副詞的用法の「元」は同レベルのものなのか、それについて更なる検討を要し、また稿を改め論じることにした。
- [注9] …… ただし、BCCWJからは後接名詞にかからない「前」の用例は確認されなかったが、ネット検索では「前衆議院議員だった大村秀章氏」「前理事長を務めた元放駒親方(元大関魁傑)の急な訃報」といった副詞的用法と考えられる「前」の用例が見られる。「前」も「元」と同様に副詞的用法を獲得しているといえるのか、「元」の副詞的用法と同様の特徴が見られるのかといった問題は更に用例収集の範囲を広げて調査する必要がある、今後の課題としたい。
- [注10] …… 「○」「×」は、「前」が基本的な用法、副詞的用法、所属を含めた名詞句との結合用法を持つかどうかということを表す。

## 参考文献

- 大島資生(2003)「第5章 連体修飾の構造」北原保雄(編)『朝倉日本語講座5 文法1』pp.90-108. 朝倉書店
- 久保圭(2016)『日本語接辞にみられる否定の意味的多様性とその体系的分類』平成28年度博士論文、京都大学大学院人間・環境学研究所
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 山下喜代(2017)「字音形態素「極・超・激・爆」について」『青山語文』47, pp.199-210. 青山学院大学日本文学会